

帯広は、アイヌ語の『オペレペレ・ケブ』（川尻が幾つにも裂けているところ）が、『オペヘロ』と転化して帯広の字が当てられた。

帯広市は、開基百年、市制施行 50 周年を記念してかつての十勝監獄跡地である緑ヶ丘公園内に『百年記念館』を建設した。帯広の草創期を語るとき、晩成社と十勝監獄に触れない訳にはいかない。この何れもが帯広建設の担い手であったといっても過言ではなからう。

本年は、晩成社が西帯広に明治 16 年（1883）9 月入植してから 120 年に当たる。

晩成社は、明治 15 年、北海道開拓を目的として発起人依田勉三等が設立した会社組織の開拓団であり、15 年間に 1 万町歩を開墾することを事業目的とした。オペリベリと呼ばれた西帯広には推計 50 人のアイヌが集落を作っていた。そこに、13 家族 27 人の移民団が入植し、必死に事業を展開するも捗らず、明治 26 年には晩成合資会社と改称し、牧場経営のほか大樹町の牧畜や幕別町の稲作、亜麻やバター生産など多くの事業を計画した。入試した時依田勉三 30 歳、かれは大正 14 年 7 3 歳で没した。「晩成社には何も残らなかった。しかし十勝野は・・・」との言葉を残して。十勝開拓の先駆的役割は高く評価されよう。晩成社の苦勞は百年記念館で確認して貰いたい。

一方、帯広の開拓には、十勝監獄の囚人が大きな役割を果たしている。北海道庁は、明治 21 年第一次植民地選定に先立ち、大津から新得に至る 27 里の道路工事の測量を終えていたが、予算の都合で工事が着手されていなかった。明治 24 年、北海道集治監は、道内の監獄が飽和状態であることから、十勝に分監候補地を選定した。分監建設の為には、膨大な資材の輸送が必要であり、道路の開削は不可欠であり、道庁と集治監の利害が一致した。釧路分監が大津から新得までの道路開削工事を請け負うこととなり、大量の囚人が投入された。明治 25 年（1892）、北海道集治監釧路分監帯広外役所が帯広柏葉高校付近に開設された。晩成社の事務所の 3 丁ほど西方である。明治 26 年 5 月予算が尽きたので、打ち切られた。この大津街道（十勝川河口の大津から新得まで、ほぼ現在の国道 3 8 号線か）の開削により、内地からの大量の移住者を受け入れることが可能となり、十勝原野は急速な発展を遂げた。

明治 28 年には現根室本線以南一帯にわたり、開墾を主な労役とした北海道集治監十勝分監が開庁した。これが十勝内陸開発の拠点となった。十勝分監は、東は札内川、南は売買川まで、現在の駅南緑ヶ丘から西帯広一帯にかけての広大な地籍を占有していた。勿論我が陸上自衛隊帯広駐屯地もそれに含まれていることは云うまでもない。十勝分監は、農業を主体とする農業刑務所であったが、他に土木建築を兼ね、冬季には伐木運搬等の労役に従事することが多かった。順調に開墾を進め、明治末には 4 5 0 ha の耕作地を所有するに至ったと言う。

明治 36 年には十勝監獄として独立改称された。十勝監獄は、大農業監獄として未墾地の開拓を進めた。長期徒刑囚が多かったので、家具、建具、農機具、陶器、紙等の製品が製作される等室内作業が発達した。また、土木工事や公共施設の建設等に従事し、帯広のインフラ整備に寄与した。囚人が建設に携わったものとして、十勝公会堂、帯広小学校、裁

判所、競馬場、緑ヶ丘公園の原型等が挙げられる。

音更国有林から伐り出された原木が使用されたが、この為に音更山道が囚人6千名により大正7年建設された。音更山道は今では「糠平国道」となっている。

十勝監獄は、大正11年には十勝刑務所、昭和14年帯広少年刑務所、昭和18年帯広刑務所、昭和51年市内別府町移転した。十勝監獄が開拓した広大な用地は民間や町に払い下げられた。特筆すべき事項としては、昭和23年から25年にかけての、北海道開発に焦点を当てた優秀受刑者を全国の刑務所から集めて構外作業を行わせた名誉作業班がある。築堤作業、道路工事、河川切替え工事等に出役した。戦後の食糧増産と過剰の拘禁の緩和対策として泊込構外作業場『土幌農場』が開設された。この農場は後に土幌町に譲渡された。

緑ヶ丘公園グリーンパーク横には、分監時代からの煉瓦造りの石油庫がある。十勝監獄の教悔堂は、現在の浄土真宗大谷派本願寺別院である。

昭和53年、帯広市は、十勝監獄が帯広の発展に寄与した功績を記念する碑を十勝監獄の故地緑ヶ丘公園の一角に建立した。

機会を見て写真をアップします。

百年記念館には、晩成社、監獄に関係する各種の資料が展示されているので、是非訪ねて下さい。

(参考:各種のHP、帯広刑務所小史(抄))